

西部支部巡検会の報告：
気田川流域の四万十帯を訪ねて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 国雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025209

西部支部巡検会の報告 ～気田川流域の四万十帯を訪ねて～

加 藤 国 雄*

1996 年 8 月 20 日(火)、本会西部支部と高等学校理科教育研究会西部支部の共催による巡検会が実施された。暫く暑い日が続いていたにも拘わらず、雲が強い日差しから参加者を守ってくれるように思える天候であった。9 時には参加者全員が二俣高等学校に集合した。あいさつに続いて案内者の狩野会員から事前の説明があり、さっそく車に分乗して出発した。

案内者：狩野謙一会員（静大）

参加者：加藤美、青木、青島、青野、伊藤秀、宇田川、加藤国、桜井、清水、鈴木勉、鈴木直、中村、藤城、松井孝、松井信、水島、山本

1 赤石裂線

最初に訪れたのは、二俣川と天竜川が合流する地点であった(図 1)。道路からロープを伝って二俣



図 1 二俣川河床の赤石裂線

写真中央が案内者の狩野会員。断層は、左端の岩の右側(水が流れている所)を南北に通っている。断層の左側(西側)は秩父帯に、右側(東側)は中新統の二俣層群に属する。

* 静岡県立横須賀高等学校

川の平坦な河床に降りた。ほぼ南北に流れる流路の西側（右岸側）では、秩父帯の緑色岩と泥質黒色岩が混在している。また流路の東側（左岸側）では、二俣層群の砂岩シルト岩互層が分布している。流路になっている所が両者の境界で、赤石裂線の最南端の露頭になる。案内者の狩野会員から、赤石裂線は 20～30 km の水平変位を伴うこと、中に含まれる有孔虫とナノ化石によれば二俣層群の時代は倉真層群に相当することなど、多くの説明があった。砂岩シルト岩互層では級化成層が認められ、見学地点の二俣層群は逆転しているようだった。

2 松間川沿いの光明層群

国道 362 号線を北に向かい、春野町の長沢からは松間川沿いの細い道を西に進んだ。橋を越えて間もなく、車を降りて歩き始めた。ここでは光明層群の緑色岩・チャート・多色互層の産状が分かる。橋の東方 100 m ほどの地点に枕状溶岩があるという説明を聞いたが、言われないと分からないほどのものであった。赤石山脈の名の由来である赤色チャートは、本来もっと北の赤石山脈主稜に分布している。それが標高 200 m にも満たないこの場所で見られる。光明層群が（相対的に）南に移動したおかげと言うべきであろう。他地域の研究から、枕状溶岩にはアクチノライトやパンペリーライトなどの高圧型変成鉱物が発見されているということにも驚かされた。

3 光明断層の破碎帯

長沢の国道に戻る途中、光明断層の破碎帯を観察した。道路から沢に降りると、左岸側（南側）に露頭があり、破碎された地層が東西に 100 m も続いていたであろうか、とにかく幅が広いことに驚いた。東端は表土に覆われており、実際には 100 m 以上の破碎帯であろうと思われる。左横ずれということがわかる部分もあった。説明によると、破碎帯に見られる粘土は最近では断層ガウジと呼ぶそうである。

4 三倉層群

気田川を渡り、公園に着いた。光明断層の近くにいたのだなあなどと考えながら昼食をとった。そこから不動川に沿って東に進み、不動に着いた。森町に至る道路と分かれて間もなく、河岸の露頭を見た。三倉層群の泥岩（頁岩）であった。黒い色と赤さびの色が混じったようで、お世辞にもきれいとは言えない。小規模な褶曲をしている。模式地である三倉付近の泥岩と確かに同じであると思った。

5 犬居層群

気田の町を過ぎると道路が細くなり、人家が少なくなる。道路がクズワ沢を横切る地点に着いた。沢に沿った細い道に面して南向きの良い露頭があった(図 2)。層理が分かりやすく、砂岩泥岩互層と思ったのは私だけであろうか。しかし狩野会員の説明によると、砂岩に見えたところは酸性凝灰岩であるという話であった。単層の厚さが一定せず、礫状の部分もある。堅さは三倉層群のものより堅いようである。これは典型的な犬居層群の地層で、つやのある鱗片状の劈開と石英脈が発達していることも特徴である。石英脈は、付加帯が潜り込むと圧力が高くなり、絞り出された水分が隙間を通して



図2 クズワ沢の犬居層群
白く写っている酸性凝灰岩と黒く写っている泥岩の互層からなり、西に急傾斜している地層。典型的な犬居層群の特徴を示す。層理面が波打ち、平行になっていない。単層の厚さが大きく変化し、引きちぎられたようになっている。

出ようとして形成される。犬居層群の成因は、プレート沈み込み帯に沿った構造的な剪断作用によって生じたメランジェ帯という説が有力であるという。沢の中を見下ろすと、赤い転石がある。沢の上流に分布する光明層群からもたらされた物であろう。

6 寸又川層群

気田川に沿ってさらに北上し、勝坂の集落を過ぎて最初の橋を渡った。川が大きく蛇行している所である。車から降りると、川の両岸に厚さ 10 cm 程度の砂岩泥岩互層があった。典型的なタービダイトで、級化層理が見られる。説明によると、ここは寸又川層群の南限に近い場所である。車から降りて最初に見た所は地層の上下が逆転している。恐らく近くに逆転していない所があるだろうという予想で探したが、短い時間では確認できなかった。川を渡って右岸側（南側）を調べれば、背斜軸の位置を知ることが出来たかもしれない。寸又川層群と同様のタービダイトが、赤石山脈の主稜線付近から紀伊半島—四国—九州まで続いていることを考えると、そのスケールの大きさに改めて驚かされる。

自分の目で確かめたくなった。

この後は二俣高等学校に戻り、あいさつをして解散になった。今回の巡検では、わずか1日で四十帯の4つの層群と2本の構造線を効率よく見学することができた。有意義な巡検となるように案内して下さった狩野会員と、運営をしていただいた方々に厚くお礼申し上げます。